

創作行為において、過去からの影響をいかに積極的価値に変換するか—中世和歌世界がみせる「芸術」への解。

土田耕督

つちだ こうすけ

1980年生まれ。専門は和歌論・連歌論を中心とした日本の芸術理論
大阪大学文学部卒。
大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻(美学)博士後期課程
単位取得退学。博士(文学)。同志社大学嘱託講師、大阪産業大学非常勤講師、奈良芸術短期大学非常勤講師

A5判・上製・約330頁 定価6,710円→5,368円 ISBN978-4-87259-611-3 C3092

中世和歌史の見直しを迫る、芸術的表現論の挑戦。

中世和歌における本歌取の概念を抜本的に捉え直し、隠された表現意識を明らかにしたうえで、古歌を再利用する意識を芸術的な「展開」として提示する。さらに、過去の和歌がもつ「心」と「詞」の関係から本歌取と古歌取を比較し、心を切り離れた断片的な詞として新たな表現を生み出す「古歌取」の価値を再評価し、藤原定家が活躍した新古今時代以降の和歌世界が古歌の再利用を展開させた真の理由を解き明かす。



ポスト新古今時代の和歌と「擬古典主義」

「めづらし」の詩学

目次

- | | |
|-------------------------|---|
| 序章 「本歌取」とは何か | Ⅲ 「本歌取」論の
パラダイム形成 |
| Ⅰ 「めづらし」の詩学と
〈擬古典主義〉 | 五 解体する「本歌取」
：『井蛙抄』に見る頓阿の分類 |
| 一 藤原為家の「古歌取」論 | 六 中世「本歌取」論の帰結
：『愚問賢注』と『近來風体』
の分類 |
| 二 藤原為家の和歌と
〈擬古典主義〉 | |
| Ⅱ 〈擬古典主義〉への順応と反動 | 終章 ポスト新古今時代の
和歌システム |
| 三 錯綜する「本歌取」 | 終わりに
「相も変わらぬことを前より少しだけ
ましにやること」の芸術学のために |
| 四 「心詞」の再利用可能性 | |

Eメールにて、ご注文を承ります。 eigyos@osaka-up.or.jp

件名を「2021年度中古文学会・特別割引」として、「お名前」「ご住所」「お電話番号」「ご注文内容」をご記入の上、お申し込みください。

【送料】国内送料無料で承ります。

【お支払方法について】

ご注文書籍とともに郵便振替用紙を同封いたしますので、そちらをご利用のうえお支払いください。公費でのご購入の場合は、請求書類等のご指定などもあわせてご連絡をお願い申し上げます。

